

行けない、来られない、帰れない ～国の扉で隔てられる家族～

日本語教師 **うめもと 梅本** **ちさこ 千佐子**

新型コロナウイルス対策では“優等生”だったはずのベトナムで、2021年1月に入って市中感染が広がり、私の活動地だった北部ハイフォン市の隣のハイズン省（首都ハノイとも隣接）を中心に、1月下旬からの全国の累計感染者は717人を数えた。「社会隔離措置」の対象者は一時15万人を超え、大波乱となった。

2月10日～16日の旧正月（テト）の連休、在留邦人は例年なら日本への一時帰国か近隣の国へ旅行をするところだが、コロナ禍の出入国制限でそうもいかず、今年はベトナム国内旅行を予定していた人たちも多かったようだ。しかし、ハイフォンの日本人駐在員やその家族たちは、当地でも陽性者が1人確認されて（2月22日に濃厚接触者2人の陽性が判明して計3人となった）、市当局が感染拡大に神経をとがらせていることから、旅行で市外に出てしまうと戻った後に隔離措置を強いられるのでは——と懸念し、それも取りやめざるをえなかったようだ。

「日本人駐在員がコロナで死亡」の衝撃

静かな旧正月休みのはずが——。ベトナム在住の日本人たちを震撼とさせる出来事が起きた。「1月17日に日本からビジネス特別便でホーチミン市入りし、2週間のホテルでの隔離期間終了後、

ハノイに移動して、現地事務所での勤務に就いたばかりの日系企業社員（50代）が、2月13日にサービスアパートの自室で亡くなっているのが発見され、のちの検査でコロナの陽性が判明した」というものである。

彼は日本出国前と、ホーチミン市のホテルで隔離期間中2回受けたPCR検査がいずれも陰性だった。だからこそ隔離明けの2月1日に飛行機でハノイへの移動が許されたはずである。PCR検査の結果、会社の同僚2人の陽性も判明したが、そもそも彼はいったい、どこで誰から感染したのか？ 市中感染の可能性もあり、感染源の特定は困難を極めていそうだ。

ハノイ市の疾病管理センターによって、彼の入国後の行動歴が仔細に公表され、滞在したホテルや居住アパート、利用航空便名、体調不良を訴えて受診した医療機関、食事したレストラン等々の名前や住所等も明示されて「同日、同所に行った者は直ちに医療センター等に申し出るように」とのアナウンスがあった。他方、多数の濃厚接触者へのPCR検査や会社の事務所のあるビル、居室のあるサービスアパートの封鎖と消毒等々、当局は対応に大わらわだったようだ。

ベトナムでは新型コロナの感染による死者が35人から長らく増えておらず、久々の死者が日本人ということで、現地では連日大きく報道された（に



もかかわらず、ベトナムの新型コロナ感染情報は、3月8日現在も死者数は35人のままなのだ。外国人は数に入れないのか？)。これまで、ベトナムでは厳しい水際対策で海外からの流入を防ぎ、陽性者が見つかれば次第、徹底的な封じ込め作戦で感染拡大を防いできた。だから日本とは桁違いに少ない累積感染者の数（2021年3月8日現在、2,512人）なのだが、そのベトナムとて無症状の新型コロナ感染者が国内に相当数いるのではないかと、また、変異型ウイルスの無症状感染者も少なからずいるのではないかと、と思われる（1月21日にシンガポール経由で関西空港に到着した30歳のベトナム人女性が、新型コロナウイルスの英国型変異種に感染していたことが判明。彼女は今回感染者を多数出したハイズン省の出身だった）。

着任したばかりの日本人駐在員が、日本よりもよほど安全なはずのベトナムで新型コロナに感染して亡くなるなんて——。おそらく単身赴任であろう彼の日本にいる家族や親族は急逝の報を受けても、ベトナムに駆けつけて遺体と対面することや日本に連れて帰ることは叶わない。厳しい入国制限下にあるとはいえ、通常の事故死や病死なら日本大使館が間に入って遺族の入国が認められるかもしれないが、コロナ感染とあっては不可能だろう。自国内でさえコロナ患者の病室を見舞うことも、葬儀を執り行うことも許されないのだから——。元気な姿を見送ったのに、遺骨になって帰ってくる彼をひたすら待つしかないとは、なんとも過酷な現実だ。

日本に帰れるが、ベトナムに戻れない

“過酷な現実”と言え、私もごく最近それを身近にした。古くからの友人が2月16日に急死したのだ。彼は国際結婚して長らくベトナムのホーチミン市に住んでいたのだが、昨年5月に心臓病

の手術のため単身帰国。術後4カ月、二つの病院で入院・治療、リハビリを受けていたが、自宅療養を希望する本人の意思で9月末に退院。とはいえ、とても一人で生活できる心身の状況になく、10月中旬にベトナムの妻子に日本へ来てもらった。日本国籍の18歳の娘は「帰国」、母親は「日本人の夫の介護を目的とした来日」で、当面3カ月の「短期滞在」。日本行きの飛行機は不定期便しか飛んでいない状況だったが、なんとか来日できた。

その後、妻の在留資格を「日本人の配偶者」に切り替えて在留期間も1年に延び、その献身的な介護と週1回の訪問看護、月1回の訪問診療で心身の状態も上向いて安心していたのだが——。2月14日の昼間、座っていたいすが倒れて、後頭部を打ちつけてしまった。あいにく妻子の外出中の出来事で、外傷もなく痛みもなかったため、大事とは思わずに過ごしてしまったが、16日の未明に異状を感じ、自身で救急車を呼ぶ。ところが受け入れをことごとく断られ、自宅前の救急車内で何時間も待機を余儀なくさせられる。3時間ほどしてようやく受け入れてくれた病院は、脳外科がなく、転院を必要と判断されるが、これまた行く先が決まらず——。ようやく都内のはずれの小さな病院にたどり着くも、その前に車内で意識不明の状態になり、緊急手術も治療も受けることなく亡くなってしまった。「外傷性頭蓋内出血」との死亡診断だった。

コロナの感染拡大で都内の医療現場が逼迫し、通常医療が後回しにされているということは報道で知っていたが、まさか自分の身近な人間がその犠牲になって、持病の心臓病以外の要因で命を落とすとは思ってもいなかった。

あまりの事態の急変に茫然自失の妻と娘になり代わって、夫の親族やわれわれ友人たちで葬儀等の段取りをつけ、母親がホーチミン市の高校に通う息子に連絡を取る。彼は携帯電話で毎日のよう



に父親と顔を見ながら話していたとはいえ、実際は昨年5月以来会っておらず、元気になって姉、母と共にベトナムの家に帰ってくるのを待っていたところだ。いきなりの訃報は15歳の少年に受け止めきれない衝撃をあたえたが、彼は父親に会いたい一心で、「一時帰国」することとする。

幸いにも翌々日の成田行きの日系航空便が手配できたが、問題は“行きはよいよい、帰りはこわい”で、片道切符しか入手できず、ベトナムへの定期便が飛行していない現在、ホーチミン市にいつ戻れるのか、見通せないことだ。

息子はベトナム国籍ではないので、東京のベトナム大使館に「帰国特別便の搭乗申請」をすることはできない（前号で、帰国を希望するベトナム人技能実習生らが、ベトナム政府の「外国人のみならず海外に出ている自国民をも対象とする」厳しい入国制限措置によって、なかなか帰国できない状況を伝えた。現在ベトナム政府は日本、韓国、台湾からの自国民の帰国特別便を設け、希望者には航空券、入国後の隔離に関連する諸費用、コロナ検査費用などを包括したパッケージ料金の一括支払いを条件に、入国者数を抑えつつ搭乗の便宜を図っている。到着地は、ハノイやホーチミン市ではなく、複数の地方空港である）。

一方で日本人のビジネス関係者向けの「日本発ホーチミン市行きのビジネス特別便」（昨年3月22日にベトナム政府が「全世界からの入国禁止」措置を取ったことで、多くの企業駐在員などが日本で足止めを余儀なくされ、ベトナム現地の業務に支障をきたすこととなった。そこで、日本大使館、JETRO（日本貿易振興会）、1,800社加盟の現地日本商工会議所が連携してベトナム政府に働きかけて了承を得、6月から特別便が不定期に就航している）に“留学生”の彼が搭乗することは難しく、また企業社員なら現地事務所に対応してもらえる新型コロナ対応の煩雑なベトナム入国ビザ

書類を個人で用意するのは容易ではない。在籍している私立高校には、「長期欠席なら留年か自主退学してもらうしかない」と言われたそうで、それならばと中退し、父亡き後の日本で姉と母親とともに暮らす決意を固めたそうだ。

出生地は日本で、父親に連れられて何度か日本に来た（一時帰国した）ことがあるとはいえ、母親がベトナム人でベトナムを生活基盤として育ってきた彼の第一言語は、ベトナム語である。日本語の読み書きはさっぱりできず、今後一から学び始めて、日本の高校の授業についていけるだけの学習言語を身に着けるのは容易ではない。しかし、「困難を乗り越えて頑張れ！」とエールを送りたい。そして今後予想される一家の日本での厳しい生活を、友人として支えていく考えだ。

国をまたいで家族に会えるのはいつ？

近年、交通網の発達と共に国境を越える人の往来が急速に進んだ。留学、仕事、結婚等々で外国に暮らす日本人は141万人余り、また日本で暮らす外国人は約293万3,000人（共に、2019年現在）。しかし、2020年春以来、オープンなはずだった国の扉がどこも閉じられ、国家の出入国管理は従前に増して厳しく、「自国民」か「外国人」かで対応が明確に分かれている。

そして、コロナ禍で「行く」も「来る」も「戻る」も「帰る」もままならない現実が、他国に離れて住む家族・親族を遠く隔てることとなった。国に帰り、実家や介護施設にいる高齢の親、病床にあり、死に臨んでいる親や兄弟などに会って、手を握り、孤独を癒し、慰めを与えることが許されない今の状況をなんとももどかしく、せつなく感じている人はあまたいるだろう。“鎖国”が解かれ、病院や高齢者施設への見舞いなどが実現できる日が一日も早くきてほしいものだ。